

# 学生の意欲を高める対面、オンライン、ハイブリッド授業 — What, How, and Why<sup>1</sup>

野村 和宏

キーワード: 双方向型コミュニケーション、対面式授業、オンライン授業、ハイブリッド型授業、Zoom

はじめに

1. 授業をめぐる考え方
  2. 授業におけるコミュニケーション
  3. スピーチの授業
    - 3.1. 授業の目標と対面授業
    - 3.2. オンラインによるパブリック・スピーチ授業の試み
    - 3.3. ハイブリッド形式によるパブリック・スピーチ授業の試み
- おわりに—成果と課題

はじめに

2020 年は教育に関わる方法が大きな変革を遂げた年となった。新型コロナウイルス感染症の世界的規模の拡大により、従来は対面で行われることがほとんどであった授業や会議などが、人が集まることで空間が密になったり、集まるために移動する段階での感染の危険を避けたりするためといった理由で、デジタル空間における画面越しの授業や会議となっていくた。こうした変化は一時的なものかと思われたが、同じような状況が長引くにつれて、大学などでは大人数の学生が集まる授業を始めとして最初から教室での対面授業ではなくオンライン授業が指定されるなど、すっかり日常の営みとして定着してきている。

従来は行われていなかった Zoom などを用いた同期型ライブ授業や、YouTube 等に教材としての動画を配信する非同期型オンデマンド授業が多く行われるようになった。同期型の授業といっても、リアルタイムでやり取りをしているにも関わらず、画面を通して教員と学生の対話が無く教員からの一方的な情報提供となったり、プライバシー保護の観点や通信環境の技術的制約から学生が画面を出さなかったりして、教員が学生の反応を確かめることができないケースもある。

オンライン授業を可能にしたテクノロジーの進化には恩恵を受ける一方、教室の対面授業であれば当然得ることのできる教師と学習者の双方向コミュニケーションに相当する学

---

<sup>1</sup> 本稿は、甲南大学国際言語文化センター主催「第 50 回 言語教授法・カリキュラム開発研究会 全体研究会」(2021 年 7 月 3 日)での口頭発表「学生の学びの意欲を高めるオンライン授業 10 の仕掛け」、外国語教育メディア学会 2021 年度全国研究大会(2021 年 8 月 21 日)での口頭発表「双方向型コミュニケーション活動を実現する対面・オンライン併用ハイブリッド型授業の試み」、第 24 回神戸英語教育学会研究大会 KELT セミナー(2021 年 12 月 27 日)での講演の内容を元に発展的に加筆したものである。

びをいかに確保するかなど克復すべき課題が残る。本論文では、対面式授業、オンライン授業において、いかに学生の学習意欲を高めることができるか、そして対面式授業とオンライン授業を併用した同時ハイブリッド型授業の中で、どのようにすれば双方向型のコミュニケーション活動を実現できるかを報告するものである。

## 1. 授業をめぐる考え方

平成 29、30、31 年改訂の学習指導要領<sup>2</sup>では、主体的・対話的で深い学び、いわゆるアクティブ・ラーニングの視点から「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」も重視した授業改善の取り組みを促している。これは単に教授者が学習者に対して知識伝達を行って学習者がそれを取り込めば完結するものではないことを意味している。Johnson 他では教育について次のように述べている<sup>3</sup>。

- ・知識は学生が意欲的に組み立て、発見し、変形し、広げるものである。
- ・教員の使命は学生の能力開発に取り組む、学生の才能を啓発して付加価値をつけてやることである。
- ・教育とは協同して学習する学生同士、あるいは教員と学生との間の人間的なやりとりである。
- ・教育とは理論と研究の複合的応用であり、相当な訓練と技能・手続きの継続的向上が必要である。

これらの項目はどれも、教員が授業を組み立てる際に十分に心に留めておくべきものである。また同書では、授業において配慮すべき項目を次のように示している<sup>4</sup>。

- ・グループを巡回して学習を支援し、小さなグループの中で個々の学生に思いやりを示す。
- ・個性や創造性、学生の感受性を促すクラス作りを行い、学生が自分が重んじられていると感じさせる。
- ・教員が学生の貢献を受け入れ、そこから学ぶとき、学生の学習経験も、より人間的になる。
- ・学んだことについての現実的な評価と、努力すれば向上できるという高い期待を与える。
- ・学生が満足感を抱いて教室を離れるようにする。
- ・学生も教員自身も名札を用意する。仲間への興味も増し、教室の雰囲気を変えていくことになる。

---

<sup>2</sup> 文部科学省「平成 29・30・31 年改訂学習指導要領(本文、解説)」([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1384661.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm)) (最終アクセス：2022 年 1 月 9 日)。

<sup>3</sup> Johnson, D.W., Johnson, R.T., Smith, K.A. 著、岡田一彦監訳『学生参加型の大学授業』玉川大学出版部 2001, pp.15-24.

<sup>4</sup> 同上, pp.160-161.

またヨーク大学言語教育センターが行った優れた外国語教師9名の授業観察において顕著に共通していた条件について、三浦・深澤は野口を引用して次の項目を紹介している<sup>5</sup>。

- ・クラス全員を参加させる。
- ・機器をうまく使う。
- ・授業進行を完全にコントロールする。
- ・教科に対する情熱にあふれている。
- ・自信にみなぎっている。
- ・生徒に共感的である。
- ・課題の説明が明快である。
- ・多様な言語活動をさせる。
- ・口頭活動を重視する。
- ・あたたかさにあふれた表情である。
- ・外国語(Target Language)の方を多く用いる。
- ・生徒に外国語(Target Language)の使用を促す。
- ・あたたかさにあふれた言葉を用いる。

ここで述べられていることはどれも外国語の授業では大切なことで、クラスというコミュニティの中で授業の営みが行われる以上、その構成メンバーである学生が自らの居場所をしっかりと自覚した上で授業に参加し、教師が学習者に対して共感的に寄り添う中で、目標言語の口頭表現活動を多く取り入れていくなど、示唆に富む記述が多い。

ここで忘れてはならないのは、授業というものが単なる知識の伝達にとどまらない要素をもっていることである。教室に教師と学習者が集う授業の意味というのは「肉体感」という観点からも捉えることができる。池澤(2009)<sup>6</sup>は「デジタル化で失ったもの」として「ここ二十年ほどの間に我々はデジタル化の恩恵をたっぷりと味わってきた。それは紙やテープやレコード盤など、重さのある媒体からの解放だった。デジタルという無重力の空間を得たおかげで、我々が接し得るデータやテキストの量は飛躍的に増した。」「デジタル化で失ったものは何か? 肉体感である。」「墨や絵の具や紙を相手に絵を描くこと、数十名の演奏者からなるオーケストラを相手に指揮をすること、それに言うまでもなくスポーツのすべて、演劇、料理、旅行…まだ文化的な営みの多くは肉体の参与を求めている。」と述べている。授業での学びにおいてもこうした肉体感を体感できることで、教師と学習者双方が充実感と達成感を得ることにつながるのではと考えている。

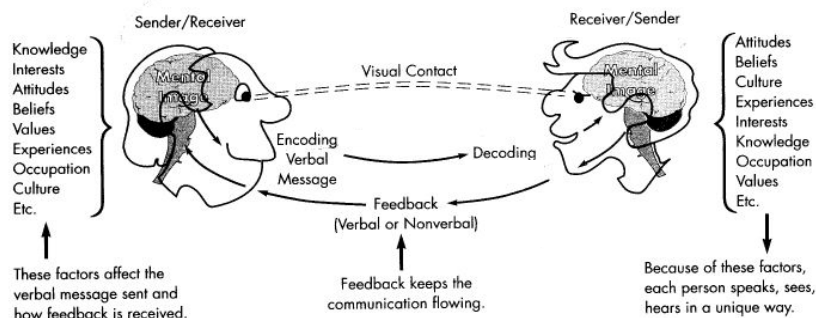
<sup>5</sup> 野口(1988) in 三浦省吾・深澤清治編著『新しい学びを拓く英語科授業の理論と実践』ミネルヴァ書房 2009, p.125.

<sup>6</sup> 池澤夏樹「デジタル化で失ったもの 肉体は悲しい…ああ」『朝日新聞』 2009年11月7日夕刊。

## 2. 授業におけるコミュニケーション

授業では教える側と教わる側の間に情報のやり取りが生じる。この情報の伝達をコミュニケーションのプロセスという観点で考えてみる。教師が学生に対して新しい情報を伝えようとするときに、教師はその内容を組織的・体系的な記号に **encode** する。この記号がいわゆる言語である。書き言葉の場合は紙や黒板、あるいはスクリーンの上にルールに基づいた文字列が示される。話し言葉の場合には声という物理的な音声が情報の受け手、つまり聞き手の耳に到達する。情報の受け手は文字の場合は目で見ること、話し言葉の場合には耳で音声を受けることで送り手からの情報を取り込む。それを今度は一定のルールに基づいて **decode** することでそこに意味が生じるということになる。

情報の受け手は意味が理解できたかどうかを始めとして、送り手に対して何らかの反応を示す。この反応としてのフィードバックには **verbal** なものと **nonverbal** なものの両方がある。面白かった場合に笑ったり、驚いた場合に声を出したりといった反応は **verbal** なフィードバックの典型で、これについては同じ空間にいる送り手はすぐに耳でとらえることができる。しかし授業を始めとして、多くの場合、聞き手は常に声を出して反応するのではなく、**nonverbal** な反応にとどまることが多い。この **nonverbal** な反応は聞き手の情報に対する理解や関心の有無を示すものであるため、それをいかに正しく漏らさずに把握するかは、コミュニケーションのプロセスにおいて情報の送り手の大事な作業となる。図 1 はコミュニケーションのモデルを図示したもので、**verbal** と **nonverbal** なフィードバックがコミュニケーションを進めていく様子を表している。



—Miculka, J. (1999). *Speaking for Success*. Ohio: South-Western Educational Publishing. p.7.

図 1 コミュニケーションのモデル

ではどのようにすれば、この聞き手の反応を正しく把握することができるのであろうか。教室での対面授業であれば、教師は学生の様子を見ることで、学生たちの反応、例えばうなずき、笑顔、座り方などの姿勢、あくび、居眠りといった様子を瞬時に把握することができる。一方、教師が学生の方に目をやることなく、下を向いて自分の資料を読み続ける限りは、こうした聞き手の反応を正しく受け止めることはできない。スピーチやプレゼン

テーションの際にアイコンタクトが重要であると言われるが、これは単に聞き手に対してメッセージを伝えようとする意欲を示すだけではなく、聞き手の反応をリアルタイムで把握することにもつながるからである<sup>7</sup>。

では聞き手の反応を把握することができない場合は、どのような影響が生じるだろうか。例えば前述のように教師が目前の学生の反応に注意を払うことなく、一方的に延々と下を向いて話し続ける場合がそうである。またオンライン授業などで教師が直接、相手の学生の様子を把握できないような場合にも似たような制約が生じる。

例えば Zoom の場合、ギャラリーモードで一度に画面に表示できる人数が、パソコンの CPU 能力が高ければ 49 人となるが、パソコンによっては 25 人までしか画面表示できない。そうすると例えば 40 人授業の場合、いかに学生がビデオをオンにして授業参加していたとしても画面をスクロールしなければ学生全員の様子を確認できないことになる。さらに学生がビデオをオフにして授業参加している場合など、教師は授業を受けている学生の反応を把握することができない。マイクについてはハウリングやノイズを防ぐために学生側はマイクをオフにしていることが多いが、画面については全員がオンにした場合でも音声のような影響が出ることはない。それでも学生によっては画面に顔を出すことを恥ずかしいと感じたり、Wi-Fi などの通信環境が整わず技術的にビデオをオンにできない場合もあるようである。授業に参加する学生のビデオをオンにすることを求めるかオフのまま受講することを認めるかについては大学側が明確に方針を示している場合もある<sup>8</sup>。

情報を伝えることが主な目的で、教員と学生の間のやり取りは重要視しない授業であれば問題がない場合であっても、コミュニケーションを重視する授業であれば、話し手と聞き手が双方向にやり取りの様子を把握できないことは大きな障害となる。岸本・三上(2013)はゲーミフィケーションという観点からゲームと大学授業とを比較分析し、学生が興味関心をもって取り組むためには次のような要素の存在が重要であることを論じている<sup>9</sup>。

- ・ 達成可能な目標設定

---

<sup>7</sup> 聞き手が話し手に対してもたらすフィードバックの意味について、Grice & Skinner は次のように述べている。A listener can enhance the communication process by providing the speaker with meaningful feedback. Although there is greater opportunity for verbal feedback in interpersonal and group environments, it is nevertheless also possible in public speaking contexts. The effective speaker will especially read the audience's nonverbal cues to assist in the speech's presentation. If listeners understand and accept the speaker's point and nod in agreement, the speaker can move to the next idea. If listeners appear perplexed, the signal should prompt the speaker to explain the idea fully before moving to the next point. —Grice and Skinner, *Mastering Public Speaking*, 10th edition, 2019, p.54.

<sup>8</sup> 例えば東京外国語大学は「本学は、大人数が受講する Zoom による授業に際し、学生側カメラはオフを推奨しています。一方、出席確認のほか、語学の授業やディスカッションを中心とする授業では、カメラをオンにすることが、授業の遂行上、必要になります。ただし、いかなる形態の授業であれ、学生がカメラをオフにすることを希望する時は、その意思を尊重します。授業開始時に、ホスト(=教員)あてのプライベートチャットなどを使って、自身の希望を担当教員に伝えていただくようお願いいたします。」としている(<http://www.tufs.ac.jp/student/NEWS/education/20042202.html>)。甲南大学では学生向けの Zoom 授業参加マニュアルで「マイク、ビデオは教員からの許可があるときのみオンにする」としている(<https://www.youtube.com/watch?v=4D5RyZN0jUM>)。

<sup>9</sup> 岸本好弘・三上浩司「ゲーミフィケーションを活用した大学教育の可能性について」デジタルゲーム学 研究。 [http://www.omurice.com/kissygame/130304DiGRA/gu\\_essay.pdf](http://www.omurice.com/kissygame/130304DiGRA/gu_essay.pdf). 2013.

- ・ 自己表現
- ・ 能動的参加
- ・ 即時フィードバック
- ・ 賞賛演出
- ・ 成長の可視化

これらの要素を授業に取り組むには、対面授業、オンライン授業それぞれに工夫が必要となる。ここでラジオ放送、テレビ放送のような一方向のコミュニケーションと、双方向のコミュニケーションをメディアの種類という切り口で整理した Bates & Poole を示す。

表1 メディアの種類とコミュニケーション・スタイルの特徴

<i>Media</i>	<i>Broadcast (one-way) Applications</i>		<i>Communication (two-way) Applications</i>	
	<i>Synchronous</i>	<i>Asynchronous</i>	<i>Synchronous</i>	<i>Asynchronous</i>
Face-to-face	Lectures	Lecture notes	Seminars	
Text		Books		Mail
Audio	Radio	Audio-cassettes	Telephone tutoring Audioconferencing	
Video	Broadcast TV Cable TV Satellite TV	Video-cassettes	Videoconferencing	
Digital multimedia	Webcasting Audio-streaming Video-streaming	Web sites CD-ROMs DVDs Learning objects Multimedia clips	Chat MUDs Web conferencing	E-mail Discussion forums

Bates & Poole (2003, p.55)によるこの表では、最新のオンライン授業については当然ながら具体的な記載はないが、例えば授業のビデオ教材を YouTube にアップして、学生がそれを各自の都合のよい時間帯に視聴するのは、この表に照らし合わせてみれば Broadcast (one-way), Digital multimedia, Asynchronous となる。また Zoom 等のオンラインミーティング用のアプリケーションを用いてリアルタイムで授業を行う場合は、Communication (two-way), Video / Digital multimedia, Synchronous と考えられる。同じく Bates & Poole (2003, p.274)は対面式授業とこうしたテクノロジーを組み合わせた授業について次のような問いを投げかけている。

- ・ What are the unique educational features of direct personal contact? Put another way, what is there about face-to-face teaching that cannot be replicated through technology?

- Under what circumstances can technology replace direct personal contact without educational loss or with educational gain?
- Under what circumstances and for what purposes are face-to-face and technology-based teaching best combined?

単に対面授業がよくテクノロジーを用いた授業が望ましくないといった議論ではなく、オンラインなどのテクノロジーを用いた授業で置き換えることのできない対面授業のもつ独自の特性は何であるのか、あるいはどのような状況であれば置き換えることができるのか、そしてどのようにすれば両者を最善の形で合体することができるのかという問いである。こうした点を考慮に入れながら、授業の内容や目的、特性に合わせて授業計画を行うことが求められている。

筆者は、甲南大学では、CERW (College English Reading and Writing)、英語科教育法、中級英語 Presentation、中級英語 Pronunciation、国際理解 C を担当している。英語科教育法、中級英語 Pronunciation は少人数のクラスで常に対面授業、CERW と中級英語 Presentation は対面授業期間とオンライン授業期間に分割、国際理解 C は履修登録者数が 200 人を超えるため常にオンライン授業となっている。これまでに述べたような教室でのコミュニケーションを重視し、Zoom によるオンライン授業であっても聞き手である学生にいかに関わりかけるかに腐心している。甲南大学では一つの授業で対面とオンラインを同時に組み合わせたハイブリッド型授業は行っていないが、非常勤として他大学で担当しているパブリック・スピーキング能力を育成する授業で試みている。次章ではこのハイブリッド授業についての実践を元にそのあり方を述べる。

### 3. スピーチの授業

#### 3.1. 授業の目標と対面授業

筆者が担当している「パブリック・スピーチ」という科目は名前のとおり人前で行うスピーチの方法について身につける授業である<sup>10</sup>。授業の目標は、パブリック・スピーチやスピーチ・コミュニケーションに関する理論を学び、実践を通して応用できるようになることである。教室において対面式で行う場合は、教員と学生は対話を重ねながら理解を深めていく。さらに頻繁にペアワーク、グループワークを取り入れながら課題の練習を行う。そしてスピーチ・セッションという形式の中にさまざまなスピーキングスタイル<sup>11</sup>を組み込

<sup>10</sup> この科目は筆者が神戸市外国語大学で担当している科目である。2020 年度末までは専任教員として、2021 年度からは非常勤講師として継続して担当している。なお筆者は甲南大学でも 2000 年度から 2010 年度にかけて非常勤講師として勤めた。その際、担当していた「中級スピーチ・コミュニケーション」の授業の中で、同様のスピーチ・セッションを通して学生のスピーチやプレゼンテーション能力向上をめざすための授業を行った。その授業実践は、大学英語教育学会(JACET)授業学研究委員会編『高等教育における英語授業の研究』に記載され、授業映像が添付 DVD に収録されている。

<sup>11</sup> 準備をして司会進行を行う Leader、即席スピーチのトピックを準備する Topic Master、準備をしてスピーチ発表を行う Formal Speaker、そのスピーチを聞いて口頭で論評を行う Evaluator などである。

み、あらかじめ割り当てられた発表をこなしていく。教室での対面授業であるため、当然のことながらお互いの声は全て聞こえ、アイコンタクトやジェスチャーを含むデリバリーも全て直感的に把握できる。聴衆のフィードバックを把握してそれに合わせて話し方を調整することさえあるパブリック・スピーチ能力の習得という観点で対面授業の意味は大きい。次の図 2 はコロナウイルス拡大前の時期に、当たり前のように教室で行われていたパブリック・スピーチ授業の様子である。



図2 コロナ感染拡大前の教室における対面授業の様子 (2018年度パブリック・スピーチ)

お互いの発表の様子は簡単に把握できるが、自らの発表そのものについては対面授業であっても客観的になることは難しい。そこで取り入れているのが、準備して発表したスピーチをビデオ映像によって観察してふり返るという方法である。そのため毎時間、ビデオカメラをセットし、授業の最初から最後まで通してビデオ録画を行っていた。その映像をDVDに焼いて記録としても役立つようレーベルも印刷し、次週に学生に配布し、学生が課題に取り組むことができるようにした。学生の多くは自らがスピーチを発表している姿を映像で観察することに最初は抵抗があるが、課題として設定されていることから全員が必ずこの段階を経ることになる。自ら予想以上にうまくできていたこと、反対にできていたが客観的に映像を見ると十分ではなかった、といった点への気づきが多い<sup>12</sup>。発表中に自分がリアルタイムで得る聴衆の反応からの手応えや発表中の自分の心理状況と

<sup>12</sup> Jeremy Harmer は *The Practice of English Language Teaching*. Longman, 2001, p.293 で、映像による観察の重要性を次のように述べている。Peer viewing is not always possible. Then, videotaping will give a chance to objectively view yourself teaching on the screen, which will lead you to obtain a reflective self. (...) Having someone film you when you are teaching can be a challenging experience, but it can be extremely valuable. (...) Many teachers are alarmed at seeing themselves on video, just as many people dislike their voices on audiotape. (...) The point of watching ourselves teach is not to engage in an orgy of self-criticism, but to evaluate our actions in terms of their effectiveness. Which bits of the lesson clearly work? How could we change the way we do this exercise so that next time it is more engaging, less confusing, and more efficient? このように映像によるふり返りは自己批判のためではなく、改善を目的として行うことが望ましい。



いったものは、全て主観的な受け止めとなる。それに対して映像は発表者の様子と聴衆の反応を客観的に事実として目の前に示すことになる。授業の中では他の学生による口頭での論評を受けたり、指導担当教員からの寸評を聞いたりするが、それ以上にこのビデオによる観察で得られる情報は発表者にとって意味がある。

このビデオを視聴して学生がレポートに取り組む際に学生に与えられる 7 つの質問項目は次のようなものである<sup>13</sup>。

1. Identify anything distracting in the opening moments of the talk. Check appearance, posture, body positioning, and use of space.
2. How was the eye contact? Did it create a sense of communication? Did the speaker (you) look too much at some people and not enough at others?
3. How effective were the speaker's (your) gestures, facial expressions, and movement? Identify anything distracting.
4. Identify any mispronounced or unclearly expressed terms.
5. How was the voice? Was the volume appropriate? Was there sufficient variation in pitch and rate to hold listener interest? Was emphasis appropriate and helpful to understanding?
6. Identify any filler words and their frequency.
7. Some additional words on the speech.

これらの観点から自らのスピーチをじっくり観察することで、学生は自ら多くの気づきを得る。対面授業を行っていた時期は、DVD 配布と同時に Reflection Report 用紙をプリントで配布し、学生は手書きでレポートを提出し、筆者のコメントも手書きによって赤字で記入して返すという敢えてアナログなスタイルをとっていた。

こうした授業での取り組みや経験を元に、筆者は大学英語教育学会授業学研究会のメンバーとして共同研究を進めていた時期、研究会の成果として出版した書籍に掲載した「よい授業とは」というセクションに「自分の考えるよい授業」の定義として次のように書いた。それは「学生が毎時間、期待感を持って教室に向かい、教室で共に学ぶことの喜びと意義を感じ、学習の達成感の余韻を味わって教室を離れることのできる授業」というものである<sup>14</sup>。ここに示したように、授業はその 90 分の時間だけでなく、授業に向かう学生の姿勢、授業時間中の学び、授業終了時・終了後に残る学び、など、いわゆる学びの円環が大切な要素ということである。通常は一週間に一度、90 分間、同じ教室の空間と時間を共有する学びのコミュニティの仲間として、その授業空間は「安心、安全、快適で楽しいと感じる学びの場」でなければいけない。いかに授業時間を充実した手応えのあるものにす

---

<sup>13</sup> これらの項目は Tim, R. P., *The Basics: Speech Communication*. South-Western Educational Publishing. 2000, p.140 を元にしてのいる。

<sup>14</sup> 大学英語教育学会(JACET)授業学研究会編『高等教育における英語授業の研究—授業実践事例を中心に』松柏社 2007, p.318.

るかが問われている。このパブリック・スピーチの授業は、そうした充実した手応えを教員も学生も感じることでできる授業となった。

### 3.2. オンラインによるパブリック・スピーチ授業の試み

新型コロナウイルスが広がり始めた 2020 年度の新学期は従来のような形で対面での授業ができなくなった。対面式で行う場合は、スピーチ発表者と聴衆の間のインターアクションは意味のあるものとして確保できるが、こうしたタイプの授業がオンライン実施となった場合に、いかに授業の特徴である学生間のコミュニケーション活動を確保していくかについてさまざま新しい工夫が必要となった。

オンライン授業実施にあたり、大学として導入するアプリケーションは当初 Cisco 社の WebEx なども検討されたが、既に海外の研究者仲間とのやり取りに Zoom を使っていた教員の強い要望もあり、大学としてビジネス・エデュケーション・ライセンス契約をして授業に活用することになった。筆者は大学で正式導入の前からゼミ学生の協力を得て、まずは無料版で Zoom 操作方法の練習にいち早く取り組み、ゼミについては 4 月中にオンラインで開始した。5 月の連休明けから本格的に大学から付与された Zoom アカウントを用いてオンラインのみで授業が全面的に始まった。このパブリック・スピーチの授業の特質を生かすべく、全くそれまでに試したことのない未知の世界での授業を進めることになった。その中で筆者自ら工夫したことは次のようなものである。

- (1) 実際の教室でもチャイムが鳴る前から教室に行き授業の準備を早めに始めて、音楽を流すなどして教室に入ってくる学生を出迎えるようにしていたが、オンラインの場合でも早めに Zoom ミーティングをスタートし、ログインする学生を待たせないようにした。
- (2) 授業を進める教員の顔と声がクリアに画面表示されるように、外付けの Web カメラとマイクを用いた。マイクについてはプロ用のヘッドセット+マイク<sup>15</sup>を複数試したり、独立したマイク<sup>16</sup>を試したりした。
- (3) 提示する教材資料は Word 等も PDF 化し、事前に学内のポータルサイトで学生に配布し、授業時には画面上で効率よく切り替えながら提示した。
- (4) 説明箇所が分かりやすいように、矢印が現れるポインター<sup>17</sup>を用いた。また PowerPoint を提示する場合も PowerPoint そのものを共有するのではなく、パソコンの画面を共有し、PowerPoint を起動したまま、他のアプリケーションとの切り替えがスムーズにできるようにした。音声ファイルや動画ファイルもすぐに再生できるように準備しておいた。
- (5) 学生にもコミュニケーションを学ぶ授業であるということを理解してもらい、全員ビデ

---

<sup>15</sup> 再生音とマイク音質を重視し、コールセンターなどで用いられているプロ用のヘッドセットマイクである Jabra 社の Jabra BIZ 2300 USB や Plantronics 社の EncorePro HW510 などを用いた。

<sup>16</sup> Razer Seiren Mini や HyperX SoloCast といった USB 接続による高音質コンデンサーマイクを使用した。

<sup>17</sup> いくつか試用したが、安定して使いやすかったものは Canon の Presenter PR1-HY である。

オをオンにして授業参加することを求めた。また学生にも画面表示をギャラリーモードにして、同じクラスの仲間の反応が把握できるように Zoom の画面設定を促した。

- (6) 授業は学生の許可を得て Zoom レコーディングを行い、結果として保存される MP4 ファイルから準備をして発表した学生の発表部分を編集し<sup>18</sup>、その MP4 動画ファイルをファイル転送ソフト<sup>19</sup>で学生に届け、学生が自分の発表を見てふり返りができるようにした。
- (7) 学生は与えられた Word ファイルを用いて Delivery Critique Reflection Report を英語で書いて提出し、それに対してフィードバックコメントを記入してメールで学生に返却した。
- (8) 最終授業日には授業のふり返りを行った後、Certificate of Completion を準備し、画面上に提示し、学生の学びの成果をお互いに認め合った。
- (9) 成績評価については、最終試験期間中における知識を問う筆記試験は実施せず、出席状況と授業への積極的参加、スピーチ発表、レポートを元に行った。

前述のように、教室での対面授業であれば学生の様子は把握しやすいが、オンライン授業ではさまざまな困難が生じる。これは自らが会議や学会、研究会などに参加した際に体感することであるが、マイクは当然ながら発言時以外はオフにするもののビデオをオンにして参加するかオフにして参加するかによって、受講する側としての緊張感に大きな差が生じる。画面をオンにしていることで、話し手に対して、理解していることや興味をもったことなど顔の表情やうなずきなどの動作でフィードバックすることができるが、画面をオフにしていると相手に見えていない状況となり、わざわざそういう反応をする必要はない。結果的に「緊張感」に大きな差がでることになる。

前述の図 1 に示すコミュニケーションのモデルでもメッセージが送られたことに対してフィードバックがあることで、コミュニケーションが前に進んでいくことを述べた。さらに注目すべきは、Noise の存在とその影響である。Grice & Skinner によれば、コミュニケーションにおけるノイズには物理的ノイズ(physical noise)、生理的ノイズ(physiological noise)、心理的ノイズ(psychological noise)の 3 種類があるとされている<sup>20</sup>。物理的ノイズは文字通り、雑音や騒音でオンライン授業にあてはめて考えれば、不安定な通信環境、聞き取りにくい音声、外部からの騒音などである。生理的ノイズはオンライン授業の場合は、例えば長時間机に座って一定距離のパソコンのモニター画面を見つめ続けることによる腰や目の疲労が相当する。そして心理的ノイズは例えば、自分の顔が画面に出ていることで不安な気持ちになったり、知らない学生とブレイクアウトルームでグループワークをさせられるのではと恐れたりといった心的なものである。これらのノイズは教室で対面授業を行う場合よりも増加する。

次の図 3 はこの学期の授業風景である<sup>21</sup>。学生が全てビデオをオンにして授業参加してい

<sup>18</sup> Windows 10 に入っている「ビデオエディター」で当該学生のスピーチを切り出した。

<sup>19</sup> 無料のファイルアップロード転送サービスとして [firestorage \(https://firestorage.jp/\)](https://firestorage.jp/) を用いた。

<sup>20</sup> Grice & Skinner (2019). *Mastering Public Speaking*. pp.9-11.

<sup>21</sup> 図 3、図 9、図 10、図 11 に示す授業風景写真については、授業のレコーディング動画から切り出して学会発表と論文執筆時に用いることを学生に説明し了解を得ている。

ることが分かる。発表者を迎える拍手をしている様子も見てとれる。

自らの発表をじっくり映像で観察することによるレポートは、対面授業の際のようにDVDとレポート用紙を直接配布することができないため、上記(6)のようにオンライン上でのやり取りとした。学生は手書きではなく、WORD上で直接タイプして打ち込むため、記述の分量が増える学生が多くなった。図4はそのレポートの一例である。



図3 Zoomを用いたオンライン形式による授業風景(2020年度前期パブリック・スピーチ)


 Kobe City University of Foreign Studies	
<b>Delivery Critique Form 2021</b>	
Speaker's Name: <b>Hiyori Hara</b>	Presentation Date: <b>5/19</b>
Speech Title: <b>It's Never Too Late</b>	
<p>1. Identify anything distracting in the opening moments of the talk. Check appearance, posture, body positioning, and use of space.</p> <p>When I said "good afternoon," I should've paused a little bit before moving on. Some people were saying good afternoon back, but I interrupted them and started talking. I also thought I should've prepared what to say more before starting my speech. I only prepared my speech, so I didn't know how to get into it, so it didn't go well.</p> <p>As we met online where most of the participants muted their microphones, you might not have expected to hear my audio reaction. But it did not distract the natural flow of my speech. Also, starting the prepared speech without making any extra opening passage is what is common especially in a formal speech presentation setting.</p>	
<p>2. How was the eye contact? Did it create a sense of communication? Did the speaker (you) look too much at some people and not enough at others?</p> <p>I think I was able to give eye contact well, but I talked by looking at the script a little bit more than the beginning towards the end. I believe this happened because I was relieved by making my speech as well as I prepared. I should've kept the tone until the end to make it better.</p> <p>It is impossible to make eye contact online, but I tried my best to look at all the audience and see their reaction, such as nodding. I also looked at the camera so that the audience can get my eye contact.</p> <p>You did a good job making eye contact; speaking to the audience. As you experienced, making good eye contact especially in an online meeting is difficult. If we directly look into the camera, it becomes difficult for us to watch and grasp the audience reaction shown on the screen. While on the other hand, if we just watch the participants shown on the full screen, then our eye direction goes off. In your case, you tried to stay in good balance between the two extremes. Great job!</p>	
<p>3. How effective were the speaker's (your) gestures, facial expressions, and movement? Identify anything distracting.</p> <p>I didn't make many gestures, but I did try. When I said "two things," I showed a peace sign, and whenever I said a number, I also showed the number with my finger so that the audience can understand better.</p> <p>I couldn't do movement because I did my speech sitting down, and I had to stand in front of my camera the whole time, but instead, I tried to make facial expressions. I moved my eyebrows when I try to emphasize a sentence. I also tried to have an expressive face so that the audience wouldn't get uncomfortable listening to my speech.</p> <p>Your gestures showing numbers worked just fine. They did not appear unnatural and also they were clearly seen as you raised your hand high enough. You spoke vividly with feelings and emotions into your voice and on your face.</p>	
<p>4. Identify any mispronounced or unclearly expressed terms.</p> <p>"I couldn't say "go ahead" naturally."          "Do you have anything that COVID-19 stopped you from doing?"          "I wanted to say "Do you have anything that COVID-19 stopped you from doing?"          but instead, I said "Do you have anything that COVID-19 / stopped you from doing?"</p> <p>This example showed how carefully you paid attention when you watched your video. It showed your sincere learning attitude toward further improvement. Where to put pause is important to clearly indicate the structure of a sentence, so next time, you could do better if you know what to say in advance.</p>	
<p>5. How was the voice? Was the volume appropriate? Was there sufficient variation in pitch and rate to hold listener interest? Was emphasis appropriate and helpful to understanding?</p> <p>I think the volume of the voice was appropriate, and the audience was able to listen clearly. I also think the pitch of the voice was also good. Although, I think I could've done better with the emphasis. I tried to emphasize some parts, but when I looked at my video, I didn't do better than I thought.</p>	
<p>6. Identify any filler words and their frequency.</p> <p>I was able to make a speech without using any filler words.</p> <p>This must have been a result of good preparation. Some filler words, if not used too often, may be allowed to naturally come into our speech.</p>	
<p>7. Some additional words on the speech.</p> <p>I've made some speeches in my past life, and I think it was the best speech I have ever made. However, there were some things I regret about the speech, so I want to make a better one next time when I have the chance.</p> <p>I found how much time and effort you had put into the speech this time. I really admire your effort. In addition, this reflection report has been done very well showing your sincere learning attitude. Based on what you have found out, you could surely do better next time you make another speech. Keep up good work and enjoy making speeches.</p> <p>(reprinted from Tim, R. P. (2000). <i>The Basics: speech communication</i>. Cincinnati: South-Western Educational Publishing, 140).</p>	

図4 学生の Delivery Critique Reflection Report の一例 (実際は A4 で 2 ページ)

授業の後、学生から寄せられた授業の感想は次のようなものであった。代表的なものを以下に示す。

表 2 オンライン授業に対する学生の感想 (2020 年度前期パブリック・スピーチ)

1	今回、オンライン授業という初めての取り組みの中でこの授業は最も成功した授業の一つだったように感じます。それは毎回丁寧に授業をしてくださり温かいコメントをくださった野村先生と、意欲的な ICC コースの皆さんのおかげです。私自身、家にいることで自分の将来やこれからのことについて考える機会が増え、悩んだり先が見えずに落ち込んだりすることがとても多かったのですが、パブリック・スピーチの授業はそんな私にとって大きな励みであり希望でもありました。一緒に授業を受ける皆の高い意欲や先生が紹介してくださった格言にいつも励まされてきました。今もまだ迷っている中ですが、この授業で感じたことや学んだことを大切にこれから頑張っていきたいと思えます。(Student K)
2	オンライン授業に切り替わって以降、課題を出すのみの授業や先生方の解説を聞くのみの授業が複数ありましたが、パブリック・スピーチでは生徒側から発言する機会が多かったので、対面授業を受けているようでした。オンラインのスピーチは初めての経験でしたが、これからの社会ではオンラインでの業務が増えるかもしれないと思うと、パブリック・スピーチの授業はとても貴重な練習だったと改めて思います。授業態勢を整えるのが困難な中、対面授業に近い充実した授業を提供してくださり、本当にありがとうございました。(Student S)
3	パブリック・スピーチは私が大学で履修した中でも特に多くの学びと刺激が得られ、自身のためになったと思える授業でした。前代未聞のオンライン授業という、先生も模索されながらの前期授業期間であったとお察しします。毎週 well-organized で enthusiastic、そして inspiring な授業をしてくださり本当にありがとうございました。(Student M)
4	修了証書をいただけるとは思っていませんでしたので、本当に嬉しいです。仲間と、そして先生とパブリック・スピーチの授業を頑張ってやり終えたことが形になって残るのがすごく嬉しいですし誇らしいです。(Student S)

教員も未知の体験の中、試行錯誤し戸惑いながらの授業であったが、こちらの工夫や授業にかけたエネルギーや熱意は十分に学生に伝わっていたように思われる。学生たちもコロナ禍の元、さまざまな授業で異なる対応を求められ、大変苦勞の多い 2020 年度の前期だったはずだが、欠席することもなく真剣に授業に取り組んでくれたことに感謝している。

### 3.3 ハイブリッド形式によるパブリック・スピーチ授業の試み

2020 年度後期に入り、新型コロナウイルスの感染状況がようやく落ち着きを見せ始めた 10 月末の時期、一月の移行準備期間を経た後の 11 月から 12 月に欠けての 3 週間は、大学としてそれまでの「原則としてオンラインによる授業実施」という方針を「原則として全ての授業で対面授業の実施をめざす」と発表した<sup>22</sup>。その中で、各授業については、

- (1) 対面授業+同時双方向型オンライン授業 (Zoom 等による)
- (2) 対面授業+オンデマンド型オンライン授業 (YouTube 等に動画をアップするなど)

のいずれかの方法を採用し、対面授業への参加が困難な学生への配慮として対面授業かオンライン授業のいずれに参加するかは学生の考えを尊重することとした。筆者は教室での対面授業が可能となったこの方針を歓迎し、教室に戻ることにした。パブリック・スピーチの授業では、前述のように学生同士のコミュニケーション活動が授業を構成する

<sup>22</sup> 2020 年 10 月 28 日付、教務部長による説明会資料から。

重要な要素であったためである。一方、教室に来て同一空間の中で対面授業に参加している学生と何らかの理由によりオンラインで参加せざるを得ない学生の間で、発表やフィードバックなどやり取りを行う必要もあったことから、上記の選択肢の中から(1)の対面式授業+Zoomによる同期型中継を行ういわゆるハイブリッド形式<sup>23</sup>による授業の実現に取り組んだ。この際に次の要求を満たすことを自ら目標として設定した。

- (1) オンライン参加学生が教員や教材を把握するだけでなく、教室の学生の様子を自らのパソコンの画面上で確認できること
- (2) 教室の学生がオンライン参加学生の授業参加の様子を教室のモニター画面上で確認できること
- (3) 教室の学生とオンライン参加学生が必要に応じて双方向にやりとりができること

前述の条件を満たすためには様々な工夫が必要となってくる。通常のオンライン授業では、教員が一台のノートパソコンを用いて授業を行うことが多いと思われる。しかし教卓に一台のノートパソコンを置いて教員がそれに向かって授業をするとすれば、図5のようなセッティングとなる。

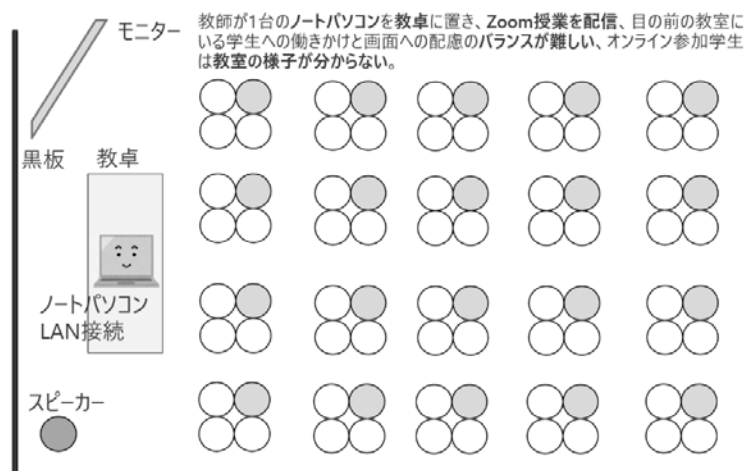


図5 ハイブリッド型授業の基本セッティング例

この場合はパソコン上で教員が画面共有によって示す資料はオンライン参加学生には自分のパソコン画面上に、そして教室の学生に対しては教室のモニター上に表示されるため、教員側からの一方的な説明を聞くという範囲では問題ない。しかし、前述の要求を満たすことができない。オンラインで参加している学生にビデオをオンにしてもらい、Zoomのギ

<sup>23</sup> この「ハイブリッド型の授業」は、対人とオンラインで同時に学習する同期レッスンで、物理的な教室と仮想学習スペースを合体したブレンド学習の一種と定義することができる。当初は緊急対策と考えられたが、今後は教育と学習の主力になる可能性が高いとする意見もある。cf. What is Hybrid Learning? (<https://www.viewsonic.com/library/education/what-is-hybrid-learning/>).

ギャラリーモードで表示することで、教室の学生がオンライン参加学生の様子を確認できたとしても、オンラインで参加している学生には教室にいる学生の様子は分からない。カメラが一台である限りはこの課題は解決することができない。

そこでまず授業を Zoom で中継する際、複数の視点を得るためパブリック・スピーチとは異なる専攻英語「発音」授業で試験的に 2 台の Web カメラを導入することにした。同時に Zoom のホストとゲストの両方に対応するため、ノートパソコンも 2 台用意した。最初に試したのが図 6 のセッティングである。CALL 教室での授業で試したセッティングで、コンソールと学生座席の間に三脚を用いて 2 台カメラ用の取付け部品で Web カメラを 2 台、片方は教員とホワイトボード側を捉え、もう片方は学生の方に向けて設置している。

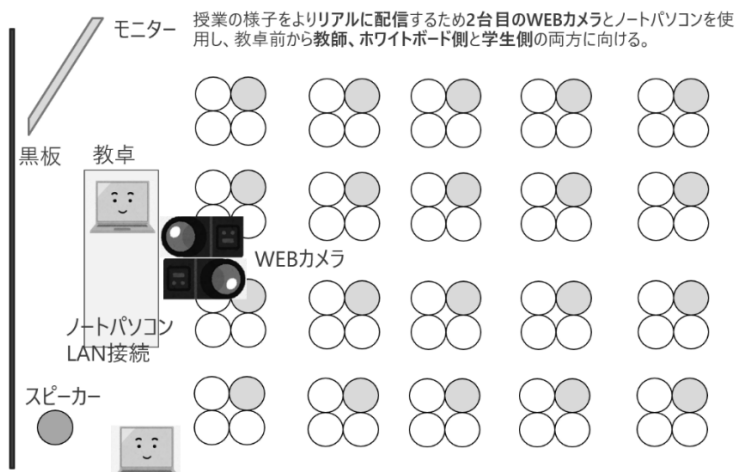


図 6 2 台の Web カメラを用いたハイブリッド型授業のセッティング例



図 7 2 台の Web カメラを用いたハイブリッド型授業のセッティング例 (実際の様子)

ホストパソコンの Zoom 画面は教室前方の大型スクリーンと学生の机の真ん中に埋め込まれたモニターに表示しており、PDF や PowerPoint 等、授業で用いる教材資料は Zoom 上

で共有することで、教室にいる学生にもオンラインで参加している学生にも等しく閲覧できるようにした。授業の様子をオンライン学生にも伝えるという意味では十分と考えられるセッティングであったが、この授業ではオンライン学生と教室にいる学生がお互いにやり取りをするという場面はなかった。

そこでパブリック・スピーチの授業で、教室学生とオンライン学生の間で双方向のやり取りを実現するために2台のWebカメラの設置位置を工夫するなど、試行錯誤を繰り返した。改善を加えた新しい設定方法は、図8のように2台のWebカメラを教室の前の位置と後ろの位置に分けて設定するものであった。ここでは前方のカメラは教室の前側から着席している学生側を向いている。これにより、例えばオンライン参加学生にも教室で授業を受けている学生の様子を教師目線で届けることができる。また教室後方からのカメラ映像は教室で参加している学生の目線で授業全体の様子を見ることができる。オンライン参加学生の顔はZoomのギャラリーモードで教室前方のモニターに映し出している。

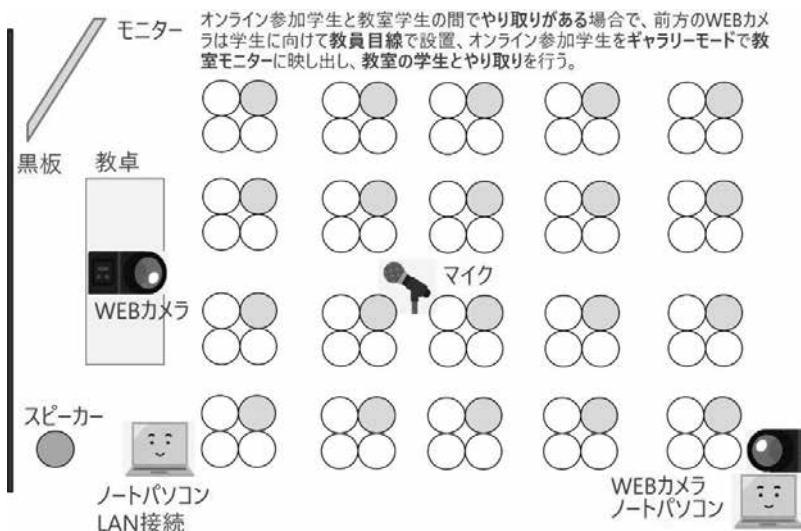


図8 2台のWebカメラを教室の前後に配置した対話型ハイブリッド型授業セッティング例

図9は教室前方の黒板の前、モニターTVの横に設置した教室前方から学生側を見るWebカメラ<sup>24</sup>を、図10は教室後方から教室の様子を捉えるためのWebカメラのセッティングの様子を示している。このようなセッティングにより教室にいる学生とオンライン参加学生の双方がお互いの様子を知ることが可能となる。



図9 教室前方に設置したWebカメラとモニター画面

<sup>24</sup> これらのWebカメラはIPEVO(アイピーヴォ)社のVZ-Rで、しっかりした本体とアームでカメラの角度調整がやりやすい。画像もオートフォーカス機能により鮮明に送り出すことができる。なおこのモデルの後から発売されたより安価で小型のV4K-PROもカメラの性能はVZ-Rと同じで教室で使いやすい。





図 10 教室後方に設置した Web カメラ(IPEVO VZ-R)



図 11 教室の前後の Web カメラによる映像を含めてモニターに映し出している様子

この授業形態が成果を収めたのは「英語教育法」と「パブリック・スピーチ」の授業である。前者では、どうしても教室での授業に参加できない学生、例えばしばらくオンライン授業が続いたことで、下宿を引き払って実家に戻っていた学生が、授業中に発表する、特に英語教育法では教室にいる学生を生徒役に見立てて画面を通して模擬授業を行うといった状況があったことである。また後者の場合には、スピーチ・セッションでの重要な役割が与えられている学生が教室ではなくオンライン参加し、画面越しに教室にいる学生に指示を出すことが必要となる状況があった。

こうして実施した授業に対し、履修した学生からは満足度の高い評価が得られた。学生からの授業に対するコメントを引用する。

表 3 ハイブリッド形式授業に対する学生の感想 (2021 年度前期パブリック・スピーチ)

1	対面で参加できたので、より一層パブリック・スピーチをしているという感じがしました。カメラも 2 台あるおかげで臨場感があり、オンラインの受講生にも見られているという感覚もあったのでとても緊張しました。しかしながらスピーカーの席に立つと全員の顔も見えるので、アイコンタクトはとりやすかったです。次回以降も同様にハイブリッド型で授業を実施していただきたいです。(Student M. S.)
---	---

2	今回は残念ながらオンラインでの参加になりましたが、教室前方と後方の二方向からのカメラ配置により教室全体の様子や発表者の姿がはっきり見えため、快適に授業に参加できました。音声もしっかりと聞き取ることができました。他の授業と比較しても、とてもオンライン側の生徒に配慮されていたと感じました。ありがとうございました。(Student S. S.)
3	Zoomでの参加だったが、2つのカメラでしっかりと授業の様子が分かりました。マイクの設置で音も拾いやすかったのですが、やはりスピーチの臨場感を味わうために前に出て発表してみたいと一層強く思いました。(Student K. O.)
4	一つ提案ですが、TTS(即席スピーチセッション)の際、Zoom上で先生側のマイクを一時的にミュートにさせていただくことは可能でしょうか? 前回のTTSでは常に教室の声をマイクが拾っていたため、Zoom上で発言している人の声がかき消されてしまっていました。そのためお手数をおかけすることになりますが、1人目のスピーチが始まったら一旦マイクをミュートにし、スピーチが終わったら再度オンにするというのを繰り返すと、ブレイクアウトルームを作らずともオンライン参加者同士でTTSがしやすくなると思いました。(Student S. Y.)
5	カメラが2つあることで教室の全体を把握することができ、不自由なく授業を受けることができました。また、スピーチも聞きやすく、マイクの問題は全くありませんでした。Zoom参加者にも柔軟な対応をしていただきありがとうございます。(Student S. M.)
6	先日の授業では、オンライン参加者のために機材の設置等様々な工夫をしていただきありがとうございます。特に定点カメラを教室の前後に2つ設置してくださったおかげで、クラス全体の様子や発表者の様子がよく見えました。(Student S. Y.)

4.2で述べたオンライン授業での最終回同様に、クラス全体で学びに対する振り返りとクラスメンバーへのお互いの賞賛を行い、教室での授業に参加した学生全員で記念写真を撮影し、教師と学生共に学びの達成感を味わいながら授業を全て終了した。このように授業としては多くの成功を収めたといえる。

### おわりに—成果と課題

これまで、対面、オンライン、ハイブリッドのそれぞれの授業における取り組みを述べた。ICTやインターネット技術の発展により、人が実際に集まることができない状況の中でも学びを止めることなく授業を継続することが可能となったという点で、こうした技術の進歩発展には多に感謝したい。一方で、対面授業とオンライン授業を統合したハイブリッド型授業を行うにあたっては現実問題としていくつもの課題も浮き彫りになった。とりわけ機器やセッティングに関するものは以下のようなものであった。

- (1) Zoomで中継するためのパソコンについては、ホストとなるもの1台に加え、ゲストとして参加し画面を送り出すためにもう1台の2台を教員側で準備する必要があった。またWebカメラも教室の前と後ろに設置するため2台準備する必要があった。
- (2) 教室で発表する学生の声をバランスよく鮮明に拾うために、マイクはWebカメラ内蔵のものではなく外付けのマイクを用意した。
- (3) 教室での学生の発表を録画して後から発表者のスピーチを切り出すために、Zoomによるレコーディング映像に加えて、教室の後ろから授業の様子を撮影するための別のビデオカメラ、マイク、三脚を用意した。
- (4) 学生の手伝いもある程度は期待できたが、それでも機器のセッティングと片付けに多くの時間を要した。具体的には授業前のセッティングを完了するためには30分~40分、授

業後に機材一式を片付けるためには20分～30分を要した。

(5) そのため当該の授業前後に他の授業の入っていない教室の確保が必要であった。

このように多くの課題はあるものの、ポストコロナ時代の授業形式として、さらには今後の学会開催、研究発表、会議などにおいて、こうしたハイブリッド形式は、海外も含む遠隔地を始めとした参加者のさまざまな環境を考えた場合に、ますます必要になってくるものと思われる。甲南学園創立者である平生は「学校は先生の為に作ってあるのではない。生徒の為に作ってあるのである。だから先生には生徒の為にすることは、何でもしてもらはなければならぬ。」<sup>25</sup>と述べている。最新の機器を用い労力を投入することで学生に対してより良い教育が可能となるのであれば、喜んでそれに取り組むことが求められる<sup>26</sup>。学生に向き合う教員として、学生の可能性を最大限に引き出すこと、教員も学生もお互いに顔の見える教育をめざし、真剣勝負の舞台である授業の場を通して、学生たちの可能性と成長を信じ、学生の心の中に学び行動する灯をともし、学生自身が自らの学びの主体となること、学びのオーナーシップを実感できる授業となるよう、引き続き改善を加えながら授業に取り組んでいきたい。

## 参考文献

- Bates, A.W. & Poole, G., *Effective teaching with technology in higher education*. Jessey Bass. 2003.  
 大学英語教育学会(JACET)授業学研究委員会編『高等教育における英語授業の研究』松柏社 2007.
- 池澤夏樹「終わり始まり「デジタル化で失ったもの」肉体は悲しい...ああ」『朝日新聞』 2009年11月7日。(池澤夏樹『終わり始まり』朝日文庫 2015, pp.46-50にも所収).
- Grice, G.L., Mansson, D.H., Skinner, J.F., *Mastering public speaking*. 10th edition. Pearson. 2019.
- Johnson, D.W., Johnson, R.T., Smith, K.A., *Active learning: Cooperation in the college classroom*. 1991.(岡田一彦監訳『学生参加型の大学授業』玉川大学出版部 2001).
- 岸本好弘・三上浩司「ゲーミフィケーションを活用した大学教育の可能性について」デジタルゲーム学研究. [http://www.omurice.com/kissygame/130304DiGRA/gu\\_essay.pdf](http://www.omurice.com/kissygame/130304DiGRA/gu_essay.pdf). 2013.
- 甲南大学「Zoom 授業参加マニュアル」(<https://www.youtube.com/watch?v=4D5RyZN0jUM>) (最終アクセス：2022年1月9日).
- Miculka, J., *Speaking for success*. South-Western Educational Publishing. 1999.
- 野口(1988) in 三浦省五・深澤清治編著『新しい学びを拓く英語科授業の理論と実践』ミネルヴァ書房 2009.
- Tim, R. P., *The basics: Speech communication*. South-Western Educational Publishing. 2000.
- 東京外国語大学「Zoomによる授業時の学生側カメラのオン・オフについて」(<http://www.tufs.ac.jp/student/NEWS/education/20042202.html>) (最終アクセス：2022年1月8日).
- What Is Hybrid Learning? (<https://www.viewsonic.com/library/education/what-is-hybrid-learning/>) (最終アクセス：2022年1月9日).

<sup>25</sup> 甲南大学ホームページ「建学の精神 平生のことば」より <https://www.konan-u.ac.jp/gakuen/hirao/kotoba.html>.

<sup>26</sup> Johnson, D.W., Johnson, R.T., Smith, K.A.は、「大学の成否は、教員が学生の教育に成功するかどうかにかかっています。そして学生に対する教育が成功するかどうかは、教員が、(a) 教育的能力を継続的に向上させるのにどれだけ関心があるか、(b) どれだけの肉体的・精神的エネルギーを仕事に対して注いだか、に左右されます。」としている。(Johnson, D.W., Johnson, R.T., Smith, K.A.著、岡田一彦監訳『学生参加型の大学授業』2001, pp.210-212) 今回のハイブリッド型授業の成果は、それを実践するために費やした肉体的・精神的エネルギーに十分見合うものであった。

## **Face-to-face, online, and hybrid classes to enhance student motivation: What, How, and Why**

**Kazuhiro NOMURA**

**Keywords:** Interactive communication, face-to-face class, online class, hybrid class, Zoom

### **Abstract**

The global outbreak of the new Corona virus has brought about a major change in educational methods. University classes, which used to be conducted face-to-face, have shifted to online classes in the digital space. Although we are benefiting from the technological advances that have made online classes possible, there are still many issues that need to be resolved, such as how to ensure the same level of learning and two-way communication between teachers and learners that is possible in face-to-face classes. In this paper, I will summarize the type of communication that takes place between teachers and students in the classroom, and then discuss how to increase students' motivation and learning effectiveness in a simultaneous hybrid class that combines face-to-face and online classes. In addition, I will report on how to realize two-way communication activities between students participating in the online class and those participating in the face-to-face class in the classroom.